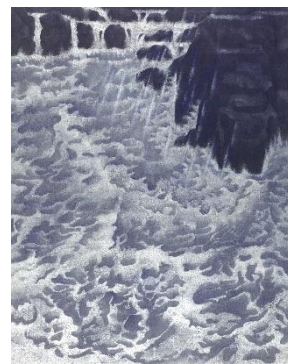


第3章 自然への呼応

造形的な作品制作を終了し、創作の転換期に描かれた作品は、自然の破壊的なエネルギーでした。《潮騒》(1965年)、《風騒》(1966年)、《洪》(1968年)は、光と闇を効果的に演出し、波濤・夕立・台風といった自然界における水の様相を表象しています。その後、《暎》(1969年)、《昏》(1974年)では、水面の光景を自然空間に漂う気韻として解釈し、多くの色彩を薄く何層にも重ね、豊潤かつ心象的な作品を制作。《東大寺暮雪》(1975年)、《蓮》(1977年)、《朝霧》(1978年)では、雪・朝露・霧を表現しつつ、その場の寒暖・湿潤をも感知させ、詩情豊かな独自の世界観を創出しました。

さて、《風騒》(1966年)、《緑雨》(1970年)、《雨の天壇》(1979年)の「降る雨」に注目してほしい。前章までは克明に描かれていた雨粒が、この時期には描かれていません。降り具合や寒暖など、太清は体感する現象を色彩に変換して見る側に感知させ、雨粒を描かずして雨の情景を描いています。対象物から不必要と考える要素を極限まで除いた前章での実験的な成果がここに表出しているといえます。



4. 《潮騒》1965年
福知山市佐藤太清記念美術館 蔵

※本展では、昨年に太清の画室より発見された『潮騒』の構想図7点が初公開されます。岩壁に大波が激しく打ち寄せる情景を、太清はどのように絵画化したのか。プラチナを駆使した7種の荒れ狂う波の表現に注目です。

第4章 水の心象

昭和55年(1980)より開始された〈旅シリーズ〉以降、《旅途》(1988年)、《雨あがり》(1991年)をはじめとし、太清が研究を重ねた水に対する表現手法の結実をここに見ることができます。中でも雪に対する表現は、前章の《東大寺暮雪》(1975年)の制作から高く評価され「雪の名手」と称されるに至りました。《旅の朝》(1980年)には春の雪のやわらかさ、清らかな空気感、優しさあふれる詩情を融合させ、特徴ある十字構図で制作しています。日展への最後の出品作となった《雪つばき》(1994年)は、真綿のような雪をまとった椿に精神性を与え、雪景色でありながら温かい情動を想起させます。雪・水・植物・動物、それらを写真であるかのようにそのまま描くのではなく、自己の目指す絵画にとって不要なものを見定め、それらの要素を抜き、描きたいと決めた心象を映し込む。写実的な花鳥と心象的な風景、分野の異なる絵画を独自の表象手法で融合させ花鳥風景画はここに完結しました。70年の画業において、太清は常に自然と向き合った写生を行い、旅先での詩情をあたためました。描かれた水の心象には、太清の自然観へのまなざしが投影されているといえます。



5. 《旅途》1988年
福知山市佐藤太清記念美術館 蔵

※「夏の思い出」などで知られる20世紀を代表する作曲家・中田喜直は、佐藤太清と交流し、この《旅途》についても音楽的なコメントを残しています。本年、生誕100年を迎える中田喜直とのコラボとして、板橋区立美術館、八幡浜市美術館ではミュージアムコンサートが開催されます。



6. 《佐田岬行》1993年
福知山市佐藤太清記念美術館 蔵

※《佐田岬行》(1993年)は、太清の言葉(制作意図)に書かれた「八幡浜から三崎一三里」にあるように、本作の取材地にほど近い、愛媛県八幡浜市美術館にて、本年7～8月に開催されます。制作されてからちょうど30年後に、八幡浜で展示されるこのタイミングにご注目ください。本作の構想図2点も初公開(八幡浜市美術館のみ)されます。